

「ゲネサレの地」

マルコの福音書 6:53～56

はじめに

今日の箇所は、このマルコの福音書では「五千人の給食」、そして「イエシュアの水（湖面）歩行」の二つの奇蹟の続きの出来事として記されている箇所です。内容としてはおもにイエシュアが多くの病人たちを癒されたというものですが、その方法はイエシュアが病人たちに触れるのではなく、病人たちの方がイエシュアに触れる、その衣にさわることによって癒されたというものです。場所はガリラヤ湖畔の地「ゲネサレ」です。ここでの出来事には一体どのような意味があるのでしょうか。今日も神のご計画の視点でこれを読み解いてみたいと思います。

1. ゲネサレ

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:53 それから、彼らは湖を渡ってゲネサレの地に着き、舟をつないだ。

イエシュアと弟子たちを乗せた舟は「ゲネサレ」という地に到着しました。しかし前回のマルコ 6:45を見ると、一行の舟は初めここではなく、「ベツサイダ」に向かうはずでした。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:45 それからすぐに、イエスは弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダに先に行かせ…

右のガリラヤ湖周辺の地図を見てください。出発地点がどこであったかは不明ですが、当初の目的地であったベツサイダと、実際のこのゲネサレとはその位置が大きく違い、どこから出発したとしても舟は大きく航路を逸れ、ほとんど逆方向に進んでしまったということになります。これは一体どういうことでしょうか。



これをヘブル語の視点、神のご計画の視点で考えるならば、「ベツサイダ」そして「ゲネサレ」この二つの地名が持つ意味から、一つのメッセージを導き出すことができます。まず前回述べた「ベツサイダ」について。この名は「家」を意味するバイト(בֵּית)と、「漁師」を意味するツアイト(טָאִיד)が合わさった言葉で「漁師の家」という意味です。漁師といえば普通、魚を捕る人を思い浮かべますが、このツアイトは本来、このような意味とイメージで使われていました。

【新改訳 2017】 創世記

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

聖書で最初の「漁師」ツァイドは、ニムロデという「地上で最初の勇士」、「【主】の前に力ある」者を指し示す言葉として用いられました。この意味をもってベツサイダ「漁師の家」という名を捉え、そこにイエシュアが弟子たちを行かせようとしたという出来事を見るならば、神のご計画におけるイエシュアの十二弟子の存在がどのようなものが表されており、つまりやがて「神の国」において彼らがそれぞれ権威ある立場、民の上に立てられる指導者、統治者的存在として、神がこの弟子たちを選んでおられるということが表されていると考えられます。すなわちこう約束されているとおりです。

【新改訳 2017】マタイの福音書

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

これはイエシュアが弟子たちに対して語られた御言葉です。これはたとえ話でも比喩的な表現でもありません。字義通り解釈すべき御言葉です。なぜならイエシュアは弟子たちにはたとえではなく奥義を告げると言われていたからです（マルコ 4:11、マタイ 13:11、ルカ 8:10）。このように「ベツサイダ」という名には神のご計画「神の国」における弟子たちの存在が表されており、それはすなわち、やがて「イスラエルの十二の部族」が「地上で最初の勇士」の家、国、「【主】の前に力ある」家、国となるということを示していると考えられます。

しかし、そのような意味を持ったベツサイダではなく、舟はそこから大きく航路を外れ、ほぼ正反対の「ゲネサレ」に到着してしまいました。この名の意味について見てみますと、ゲネサレ(גֶּנֶזֶר)，この名は「園、庭」を意味するガン(גַּן)と、「懲らしめる」という意味のヤーサル(יָסַר)が合わさった言葉と見ることができ、「懲らしめの庭」というような意味であると言えますが、この「懲らしめる」ヤーサルとは本来、神がイスラエルの民を懲らしめるという意味で用いられた言葉です。

【新改訳 2017】レビ記

26:18 もし、これらのことが起こっても、あなたがたがなおわたしに聞かないなら、わたしはさらに、あなたがたの罪に対して七倍重く懲らしめる。

神はイスラエルの民がご自分の戒め、命令に聞き従うならば祝福を、しかしそうしないならば「懲らしめる」という意味でこのヤーサルという言葉を用いられました。実際に彼らはこれに聞き従わず、神に逆らい続けたため、旧約聖書に記されたイスラエルの歴史にあるとおりに、彼らは自分たちの国を失い、離散の民となり、国々の中で迫害され、その命を脅かされるという懲らしめを受け、ユダヤ人とも呼ばれる彼らは、今日においてもなおその状態にあります。A.D1948年にイスラエルはわずかながら国土を取り戻しましたが、神がそのご計画の中に提示しておられる、先に述べた「地上で最初の勇士」の家、国、「【主】の前に力ある」家、国というレベルにはほど遠い状態です。今日も常に周辺国との臨戦状態にあり、ただユダヤ人であるという、それだけの理由で命を狙われています。この事実が今日の箇所および前回の出来事には表されていると考えられます。すなわちベツサイダに向かったはずの舟が、その航路を大きく外れ

てこのゲネサレに到着したという出来事であり、その中で弟子たちが「理解せず、その心が頑なになっていた（マルコ 6:52）」という状態が、神の選びの民でありながら、その心の頑なさのゆえに聞き従わず、神からの懲らしめを受けることとなったイスラエルの民の姿、その事実が表されているということです。しかし、

【新改訳 2017】箴言

13:24 むちを控える者は自分の子を憎む者。子を愛する者は努めてこれを懲らしめる。

とあるように、神がイスラエルの民を懲らしめられるのは、彼らを愛するがゆえです。この懲らしめによって、やがて彼らは神を理解し、聞き従うようになるのです。その事実が次の節に表されています。

2. 気がついた

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:54 彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気がついた。

この出来事は、ゲネサレにいた人々が「**イエスだと気がついた**」、つまりどんな病をも癒し、悪霊を追い出し、死人も生き返らせるという噂の御方が来られたことに「**気がついた**」という状況なのですが、ここに使われているナーハル(נָהַל)「見分ける」という意味の言葉は、本来このような箇所では使われませんでした。

【新改訳 2017】創世記

27:22 ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼にさわり、そして言った。「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ。」

27:23 ヤコブの手が、兄エサウの手のように毛深かったので、イサクには**見分けがつかなかった**。それでイサクは彼を祝福しようとして、

27:24 「本当におまえは、わが子エサウだね」と言った。するとヤコブは答えた。「そうです。」

27:25 そこでイサクは言った。「私のところに持って来なさい。わが子の獲物を食べたい。そうして私自ら、おまえを祝福しよう。」そこでヤコブが持って来ると、イサクはそれを食べた。またぶどう酒を持って来ると、それも飲んだ。

アブラハムの子イサク、彼は父から受け継いだ神の祝福を自分の長男エサウに与えようと考えていました。しかし老年になって目が見えなくなった彼は「**見分けがつかなかった**」ために、エサウになりすました次男のヤコブ、すなわちイスラエルを祝福してしまいます。ここに聖書で最初のナーハルが使われています。ですからナーハルには本来、イスラエルが祝福されるということが指し示されているのです。その祝福とは創世記 12 章、および 22 章で神がアブラム、すなわちアブラハムに約束された祝福であり、その子孫として受ける祝福です。すなわち、

【新改訳 2017】創世記

22:17 確かにわたし（神）は、あなた（アブラハム）を大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

という約束、神のご計画です。イスラエルの民に対するこのご計画は決して変わりません。たとえ彼らがその心の頑なさのゆえに神に聞き従わず、逆らったとしても、これを懲らしめ、必ず成し遂げられるのです。そしてそれは同時にイエシュアが神の御子メシアであることを彼らが理解する、受け入れるようになることをも意味します。その事実が「**人々はすぐにイエスだと気がついた**」という出来事には表されると考えられます。イスラエルの民、ユダヤ人の神に対する理解のなさ、その心の頑なさとは実にこの一点にあるのです。彼らはイエシュアを神の御子メシアとして認めない、信じないために今日もなお「懲らしめの庭」、まさに「ゲネサレ」の地にいます。しかしそんな彼らがこの真実に気がつく、ユダヤ人たちの霊の目が開かれる日が来ます。その時どのような事が起こるのかが表されているのが次の節です。

3. 病人を床に載せて

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:55 そしてその地方の中を走り回り、どこでもイエスがおられると聞いた場所へ、病人を床に載せて運び始めた。

ゲネサレの人々は、イエシュアを求めて「その地方の中を走り回り」ました。ここで使われている「走る」という意味のルーツ(לָרַץ)は本来、アブラハムが神である主を自分の家に迎え、もてなすために走っていた出来事を指し示す言葉です。

【新改訳 2017】 創世記

18:1 【主】は、マムレの榿の木のところ、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。

ですからこの様子は、イエシュアがやがてアブラハムの子孫であるイスラエルの民のもとに、地上に再臨される時のイスラエルの民の姿を表していると考えられます。その時彼らはイエシュアを神として、神の御子メシアとして迎えるということです。

また人々は「**病人を床に載せて運び**」ました。ここに使われている「運ぶ」という意味のナーサー(נָסַר)は本来、このような意味で使われました。

【新改訳 2017】 創世記

4:7 もしあなたが良いことをしているのなら、(神に) 受け入れられる。

このようにナーサーは本来、神に「**受け入れられる**」、つまり神に目を留められる、選ばれるという意味で用いられました。イエシュアをメシアとして迎えるイスラエルの民を、イエシュアも、神もまたご自分の選びの民として受け入れられる、そのような時が来ることが表されていると考えられます。しかしその時の彼らの様子は決して良い状態ではないようです。「**病人を床に載せて**」と記されている様子には、イスラエルの民がみな、もはや自分で立つことも歩くこともできず、死にかけているような、そんな状態、危機的状況に陥っているということが表されていると考えられます。なぜならイエシュアが地上に再臨される前兆はこのようであると語られているからです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな**苦難**があるからです。

ここに預言されている「**苦難**」こそ、先に述べたイスラエルの民の頑なさのゆえに与えられる神の懲らしめの究極的な現れです。これは「大患難（時代）」とも呼ばれています。その内容は、イスラエルの民、ユダヤ人に対する大迫害、大虐殺です。第二次世界大戦中にドイツによって行われたホロコーストは有名ですが、そればかりではなく、彼らに対するこのような仕打ちは、その歴史の中で何度も何度も繰り返されてきています。しかしそれらとは比較にならないほどの大きな「**苦難**」が、イエシュアが地上に再臨される直前には起こるのです。ですからイスラエルの民はほとんど絶滅寸前の状況でイエシュアをお迎えすることになります。その事実がここには表されていると考えられます。そしてご自分の選びの民をみもとに集め、救い出されるイエシュアの、そのもう一つの姿が次の節には表されています。

4. 衣の房

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:56 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。

ここでイエシュアは、病人たちをご自分の「**衣の房に…さわらせ**」るという方法で癒されました。この「**衣**」はベゲド(בגד)といい、本来は結婚する花嫁に贈られる衣装を意味する言葉です(創世記 24:53)。また「**房(ふさ)**」はカーナーフ(קַרְנָפ)で、本来は空を飛ぶための「翼」と訳された言葉です(創世記 1:21)。この二つの言葉の持つ本来の意味に触れる、受け取る「**さわった人たち**」の存在、それはキリスト(メシア)の花嫁と呼ばれる、私たち教会を表していると考えられます。そして天の大空を飛ぶための「翼」カーナーフは、教会がこの地上から携挙される、イエシュアの空中再臨の出来事を指し示していると考えられます。

迫害と大虐殺の歴史を辿っているのはユダヤ人だけではありません。実は私たち教会も同様なのです。地球上でキリスト教ほど迫害された宗教はありません。私たちの日本でもかつてはキリスト教迫害が国家的に行われ、その殉教者の数は世界第二位と言われています(ちなみに第一位はローマ帝国による迫害)。たしかに今日のキリスト教はその迫害にも負けず、今や世界最大の宗教となりましたが、サタンの攻撃、偽りによってその教えは歪められて律法化し、また異教や異文化の影響を受け、多くの教会が神のご計画

に目を留められず、人間中心の集まりに成り下がっており、残念ですがこの教会も、私たちもまた例外ではありません。この状況、状態を脱するには、救い出されるにはイスラエルの場合と同様、イエシュアに来ていただくしかないのです。ただイスラエルの民、ユダヤ人と私たち教会とではその救われる方法が異なっています。すなわちイエシュアの地上再臨と、そしてこの空中再臨です。しかしこの二つの事実、神のご計画はどちらも同じくイエシュアただ御一人によるものであるため、この箇所ではまるで一つの出来事のように記され、表されていると考えられます。

5. 癒す

そして人々は「**みな癒やされ**」ました。ここで使われているヘブル語ヤーシャ(יִשָּׁא)は本来、「助ける、救う」という意味で、何よりイエシュア(יֵשׁוּעַ)という名の由来となっている言葉です。救われるすべての人はみなこのイエシュアによって、どんな知恵でも手段でもなく、ただイエシュアによって、この御方が実際に来られることによってのみ救われるのです。その事実が今日取りあげた箇所には「型」として表されていると考えられます。

今日、教会は一般社会の企業や学校などの影響を受けて、様々な教育プログラムや方策を講じて、より良い人材、より良い組織を作り上げようとしています。しかし教会がこの地上に誕生して二千年も経つというのに、その成果がほとんど見られません。初代教会と今の教会の間に、一体どれほどの成長が見られるでしょうか。成長よりもむしろ墮落、変質、弱体してしまった部分の方が逆に多いのではないのでしょうか。私は教会を批判してこのようなことを言っているわけではありません。ただイエシュアが来られることの必要性和重要性を訴えているのです。私たちの目的、その祈りと願いは、いわゆるより良い信仰生活を送ることで、次の企画のための良いアイデアが与えられることでも、聖書に隠された謎を解き明かすことでもなく、ヨハネの黙示録の最後に記された

「主イエスよ、来てください。」(ヨハネの黙示録 22:20)

という、ただこの一事に尽きるのではないのでしょうか。ですから何をやるよりもまず私たちはイエシュアを待ち望むべきです。そしてこの事の重要性を主張し、宣べ伝えるべきなのです。この御方が来れば、イエシュアさえ来られれば、すべてが解決するのですから。イエシュアが来られる日を求めましょう。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書

4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録

22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。